

ボランティア活動の継続要因

米 澤 美 保 子*

Factors for Continuation of Volunteer Activity

Mihoko Yonezawa

要旨：ボランティア活動の継続には、現在活動しているボランティアが休止することなく活動を継続する必要があることから、ボランティア活動を辞めたいと思ったことのあるボランティアの意識（ボランティア休止希望）からボランティア活動の継続要因を、「手段的支援」、「情緒的支援」からなる分析枠組にそって明らかにすることを本論の目的とする。ボランティア連絡協議会に登録しているボランティアを対象に質問紙票調査を実施した。調査から、「相談相手」、「人的資源」、「時間」の不足、「地域意識」への愛着の低さを感じている程、ボランティア休止希望が高くなり、「ボランティアを仲間と一緒にできる『楽しみ』」だと感じている程、ボランティア休止希望が低くなることが明らかになった。

Abstract : It's important that volunteers who participate on volunteer activities continue to do so. Then the purpose of this study is to clarify continuation of voluntary activities with the analysis frame that consists of "instrumental support", and "emotional support". This study examines volunteer who was registering to the Volunteer Council of cityA by questionnaire. It indicate that the conscious that intend to quit volunteer activities becomes higher so as to feel "an adviser", "human resources", lack of "time", lowness of the attachment to "the local consciousness" and lowered so as to feel it when was "pleasure" that can do volunteer with companion".

Key words : ボランティア volunteer 継続要因 factor for continuance 手段的支援 instrumental support 情緒的支援 emotional support

I はじめに

ボランティア元年と呼ばれた1995年に起こった阪神淡路大震災以降、ボランティアというものに大きな関心を集め、認知が高まったといわれている。ボランティア数の推移を見てみると、ボランティア数もボランティア団体数も年々増加していることがうかがえる（図I-1）。

社会状況の変化に伴い地域社会のニーズに応えるボランティア活動への期待は高まっている。ボランティア活動には、国の施策に組み込まれてしまう危険性を孕んでいるとの言及も見られるが、現在実施されているボランティア活動は重要であり、活動の継続は重要であると考えられる。ボランティア活動の状況について、全国社会福祉協議会によると活動を行う上で困っていることとして「新しいメンバーが確保できな

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 助教

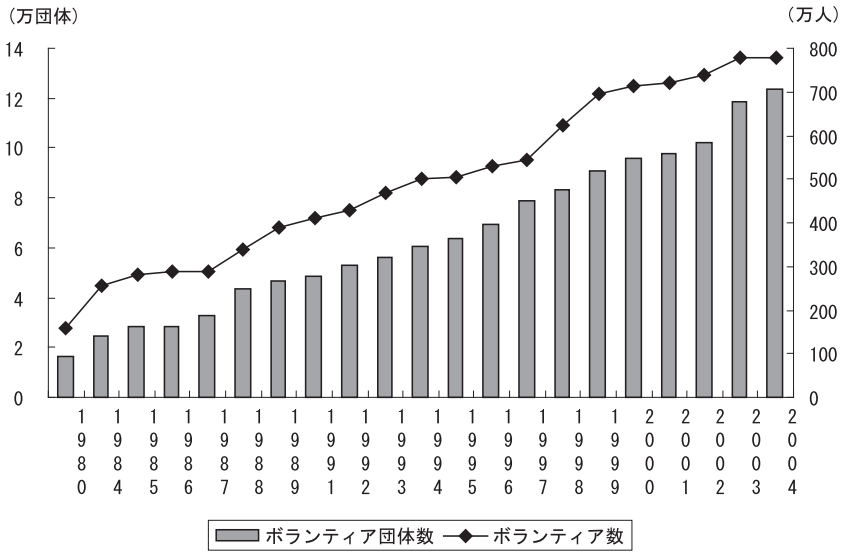


図 I-1 ボランティアの推移

出典：(全国社会福祉協議会 2004 a)³⁾より筆者作図

い」ということが挙げられている¹⁾ことから、ボランティア活動の継続には、現在活動しているボランティアが休止することなく活動を継続することが必要である。

ボランティア活動の継続性に関する先行研究として、望月七重らは、高齢者大学の卒業生を対象に調査を実施し、ボランティア活動の継続意向に影響を与えている要因は、「家族の協力」、「他人や社会のために役に立ちたいと思ったから」、「自分が活躍できる場がほしかったから」や「ボランティア活動で築いた人間関係の維持」であるとしている(望月ら 2002)²⁾。小澤千恵子は、福祉サービスの供給形態として期待されているがその特質について詳細な調査がなされていない有償ボランティアについて、ケーススタディから充実感、やりがいや有償ボランティア以外の社会活動への参加などが活動継続要因としている(小澤 1998)⁴⁾。青山美智代らは、介護ボランティア不足やボランティアの高齢化という深刻な事態に対し、今活躍している介護ボランティアが継続するために必要な支援を探求する目的から、老人福祉施設の介護ボランティアを調査対象として、援助法などを的

確に伝えてくれる職員、あるいは介護ボランティア仲間から多くの支援を受けることが活動の継続要因であるとしている(青山ら 2000)⁵⁾。稲月正は、ボランティア社会の構築が必要であるとの考えから、福祉ボランティアが生活のなかに構造化される契機を探ることを目的とし、地域関係が強いほど福祉ボランティアの構造化が強まるとしている(稲月 1994)⁶⁾。

このように整理を試みた先行研究から、仲間、充実感、やりがいや地域関係などがボランティア活動の継続要因であると示されたが、対象がボランティア活動の活動者全体であり、また、意識の高い高齢者大学の卒業生、有償ボランティアや高齢者施設という専門機関内で活動しているボランティアと限定的であった。本論では現在ボランティア活動を行っているボランティアの中で、ボランティア活動をやめたいと思ったことがあるボランティアの意識(以下ボランティア休止希望)からボランティア活動の継続要因を明らかにすることを目的とし、ボランティア連絡協議会に登録しているという限界はあるが、ボランティア連絡協議会の登録ボランティアを対象として、ボランティア活動の

継続要因を明らかにしたい。

II 分析枠組

直井道子⁷⁾が、「手段的支援」と「情緒的支援」について高齢者を対象とした研究を整理し、つぎのように述べている。手段的支援については、「お金を貸す、介護をするなど具体的な行動でもって役にたつサポートであり、『実体的』といってもよい⁸⁾とし、情緒的支援を、「具体的な行動を伴わなくても精神的な支えになる⁹⁾としている。直井が示した「手段的支援」と「情緒的支援」は高齢者に限らず支援を考える場合には適当であると考え、本論でボランティア活動の継続に影響をおよぼす要因として設定した。

本論での「手段的支援」については、「場所」「時間」「活動資金」「人的資源」「行政や社協」を構成要素とした。「場所」は活動する場所の確保が可能かどうか、「時間」はボランティア活動を行うための時間の確保が可能かどうか、「活動資金」はボランティア活動を行うための資金が充分かどうか、「人的資源」は新規メンバー、中心メンバー、後継者など、ボランティア活動を継続するために必要とされる活動メンバーが充足しているかどうかを示す。また「行政や社協」はボランティア活動を行うために、行政や社協に求められている支援を示す¹⁰⁾。

「情緒的支援」については、「ボランティア仲間¹¹⁾は、ボランティア活動と一緒にいるメンバーの存在、「相談相手¹²⁾は、自分の辛さなどを相談できる相手の有無、「他者からの認知」は、地域の人からの自分たちの頑張りに対する認知、「地域意識」は、地域に対する愛着度を構成要素とした。以上のことから、ボランティア活動の継続要因を明らかにするため、図Ⅱ-1の分析枠組にそって分析を進めていくこととする。

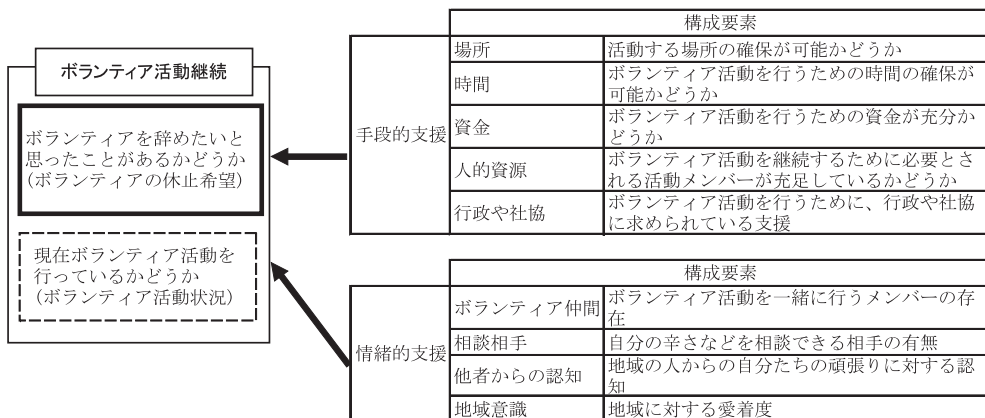
III 調査の概要

1 調査対象

調査は、筆者が在学していた大学と関わりのある A 市ボランティア連絡協議会に登録しているボランティアグループに所属する、ボランティアを対象に実施した。配票数は 64 団体、1,959 人¹³⁾ (表Ⅲ-1) である。

表Ⅲ-1 調査概要

調査実施時期	2005 年 7 月～10 月
調査方法	留置法
配票数	64 団体 1,959 票
回収数	50 団体 763 票
回収率	38.9%
有効回答数	760 票



図Ⅱ-1 分析枠組

2 A市ボランティア連絡協議会概況

A市ボランティア連絡協議会は、1979年4月にボランティア養成講座により、ボランティアグループの数が年々増えてきたことから発足された。その目的は、「A市のボランティアの資質の向上のための研修とボランティア相互の連絡及び交流を図り、ボランティア活動を通して『明るい山口のまちづくり』に寄与すること」である。また、「『できることを、できるときに、できるところで』を活動のモットーにして、長く続けられるボランティア活動と誰もが気軽に参加できるボランティア活動を目指して」⁴⁾、活動を推進している。設立当初の登録数は、10グループ、会員数250人、2005年は67グループ、会員数2,461人¹⁵⁾である。

ここで、A市ボランティア連絡協議会登録グループの活動年数を全国調査の結果と比較してみる(図Ⅲ-1)。登録グループは、20年以上の活動年数のグループが過半数を占めており、全国調査の結果と比べて、活動年数の長いグループの割合が非常に高いことがうかがえる。

3 調査時期・調査方法

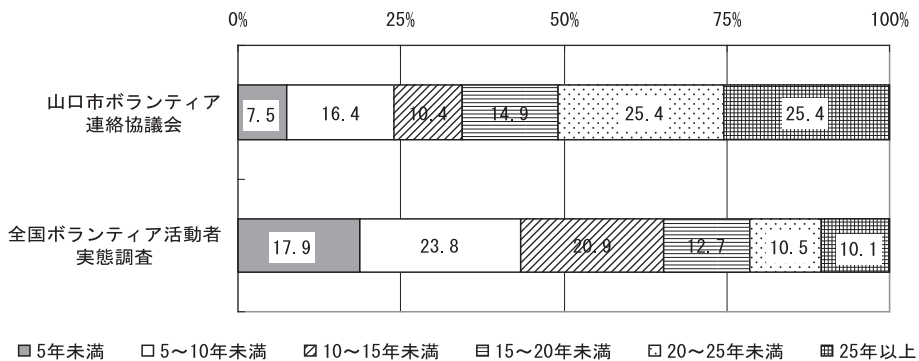
調査実施時期は、2005年7月から10月で、留置法により実施した。なお、プリテストとして、A市ボランティア連絡協議会役員会の出

席者8名に実施した。調査票の配票、回収については、全てA市社会福祉協議会を通して実施した。配票については、公民館など、市役所の通送便が利用できる場所で定例会を実施しているボランティアグループには、通送便によって各ボランティアグループに配票された。通送便のない場所で定例会を実施しているボランティアグループに対しては、ボランティアグループの代表者に、そのグループの人数分の調査票を郵送した。また、各ボランティアには、定例会で配票された。

調査票の回収については、定例会で各ボランティアから調査票を回収し、通送便の利用できるボランティアグループは、通送便でA市社会福祉協議会に返送し、通送便の利用できないボランティアグループは、代表者がA市社会福祉協議会まで持参するという方法がとられた。

調査票への記入は、各ボランティアグループに一任した。定例会の場で記入するグループや、調査票を持ち帰って記入するグループがあったようである。

回収は50団体763票、回収率は38.9%であった。白票を除き760票を有効回答とした(表Ⅲ-1)。



■ 5年未満 □ 5～10年未満 ▨ 10～15年未満 ▩ 15～20年未満 □ 20～25年未満 ▩ 25年以上

図Ⅲ-1 ボランティアグループ活動年数

注) 全国ボランティア活動者実態調査：出典(全国社会福祉協議会2002)¹⁶⁾より作図。なお、無回答を除いて作図しているので合計は100%に満たない。

Ⅳ 分析方法

1. 変数

分析枠組の「ボランティア活動継続」の「ボランティア休止希望」を被説明変数、「手段的支援」、「情緒的支援」の構成要素を説明変数(表Ⅳ-1)とし、分析を実施。以下変数について示すこととする。

(1) 被説明変数

「ボランティアの休止希望」については、「できることなら、ボランティアを辞めたいと思ったことがある」を「1：全くそうだ」「2：まあそうだ」「3：あまりそうではない」「4：全くそうではない」の4件法で質問した。

(2) 説明変数

①手段的支援

「場所」については「活動する場所の確保が難しい」、「時間」については「仕事や学校との

両立が難しい」、「活動資金」については「活動資金が不足している」。「人的資源」については「後継者が育たない」、「新しいメンバーが集まらない」、「中心となるメンバーが不足している」を、「1：全くそうだ」「2：まあそうだ」「3：あまりそうではない」「4：全くそうではない」の4件法で質問した。「行政や社協」については「施設を利用しやすくすべきだ」、「資金や物品の援助をすべきだ」、「ボランティアが気軽に相談できるようにすべきだ」、「ボランティアに携わる人の育成を行うべきだ」、「ボランティア活動やボランティアに対して表彰等を行うべきだ」を、「1：そう思う」「2：まあそう思う」「3：あまりそう思わない」「4：そう思わない」の4件法で質問した。

②情緒的支援

「ボランティア仲間」については、「ボランティアは仲間と一緒にいける『楽しみ』」を、

表Ⅳ-1 構成要素

分析枠組	構成要素 (説明変数)	
手段的支援	場 所	活動する場所の確保が難しい
	時 間	仕事や学校との両立が難しい
	活動資金	活動資金が不足している
	人的資源	後継者が育たない 新しいメンバーが集まらない 中心となるメンバーが不足している
	行政や社協	行政や社協は施設を利用しやすくすべきだ 行政や社協は、資金や物品の援助をすべきだ ボランティアが気軽に相談できるようにすべきだ ボランティアに携わる人の育成を行うべきだ ボランティア活動やボランティアに対して表彰等を行うべきだ
情緒的支援	ボランティア仲間	ボランティアは仲間と一緒にいえる「楽しみ」 ボランティアを続けるためには、メンバー同士の支え合いが必要だ
	相談相手	ボランティア活動を行っていて、自分の辛さや苦しさを相談できる人がいない
	他者からの認知	ボランティアの相手や地域の人に自分たちの頑張りを認めて欲しい
	地域意識	今後も今住んでいる地域に住み続けたい この地域はこれから生活の場としてだんだんよくなる この地域の人間関係は面倒だ この地域のまとまりは良いほうだ

「1: 全くそう思う」「2: まあそう思う」「3: あまりそう思わない」「4: 全くそう思わない」の 4 件法で、「ボランティアを続けるためには、メンバー同士の支え合いが必要だ」を「1: 全くそうだ」「2: まあそうだ」「3: あまりそうではない」「4: 全くそうではない」の 4 件法で質問した。「相談相手」については、「ボランティア活動を行っていて、自分の辛さや苦しさを相談できる人がいない」、「他者からの認知」については、「ボランティアの相手や地域の人に自分たちの頑張りを認めて欲しい」を「1: 全くそうだ」「2: まあそうだ」「3: あまりそうではない」「4: 全くそうではない」の 4 件法で質問した。「地域意識」については、「今後も今住んでいる地域に住み続けたい」「この地域はこれから生活の場としてだんだんよくなる」「この地域の人間関係は面度だ」「この地域のまともりは良いほうだ」を、「1: そう思う」「2: まあそう思う」「3: あまりそう思わない」「4: そう思わない」の 4 件法で質問した。

2. 分析対象

ボランティアの休止希望は、ボランティア活動中の者の中で休止を希望している者であることから、760 票の有効回答のうちボランティア活動を「行っている」と回答した 619 票を分析対象とした。

3. 分析方法

重回帰分析を行う上で、上述したように本調査では変数が「1: 全くそうだ」「2: まあそうだ」「3: あまりそうではない」「4: 全くそうではない」および「1: そう思う」「2: まあそう思う」「3: あまりそう思わない」「4: そう思わない」のように、数字が小さい程肯定的であるため、分析前に「4: 全くそうだ」「3: まあそうだ」「2: あまりそうではない」「1: 全くそうではない」および「4: そう思う」「3: まあそう思う」「2: あまりそう思わない」「1: そう思わない」と、数字が大きい程肯定するように変

数の値を反転させた。

まず分析対象者の全体像を把握するため単純集計を行い、説明変数の方向性を整えた後、強制投入法による重回帰分析を実施した。分析には統計ソフト SPSS 10.0 JforWindows を用いた。

V 分析結果

まず、回答者の性別、年齢、活動期間の単純集計結果は次のとおりである。性別は、女性 506 人、男性 112 人、無回答 1 人。年齢は 20 歳未満 (18 人)、20 歳以上 30 歳未満 (17 人)、30 歳以上 40 歳未満 (13 人)、40 歳以上 50 歳未満 (39 人)、50 歳以上 60 歳未満 (116 人)、60 歳以上 70 歳未満 (233 人)、70 歳以上 80 歳未満 (157 人)、80 歳以上 (17 人)、無回答 (9 人)、活動期間は 1 年未満 (39 人)、1 年以上 2 年未満 (47 人)、2 年以上 5 年未満 (134 人)、5 年以上 10 年未満 (169 人)、10 年以上 (221 人)、無回答 (9 人) であった。50 歳以上が 8 割以上を占め、活動期間が 5 年以上が 6 割以上であった。1997 年に実施した調査結果と比較すると、活動期間が 5 年以上の割合が 10 ポイント程度高くなっていることから、ボランティア活動者の活動期間の長期化がうかがえる。

重回帰分析の結果、「人的資源」の「後継者が育たない」、「新しいメンバーが集まらない」、「中心メンバーが不足している」の 3 変数に、多重共線性が高いとされる VIF が 2 以上の値が示された (表 V-1)。そこで、3 変数の内「中心となるメンバーが不足している」を残し、「後継者が育たない」、「新しいメンバーが集ま

表 V-1 多重共線性

説明変数	β	有意確率	共線性の統計量許容度	VIF
後継者が育たない	0.02	0.84	0.29	3.43
新しいメンバーが集まらない	0.13	0.14	0.28	3.56
中心となるメンバーが不足している	0.17	0.01	0.48	2.08

表V-2 相関係数

	ボランティア 休止希望	活動場所の 確保困難	仕事や学校 との両立困難	活動資金 不足	中心メンバー 不足	施設利用 強化	資金・物品 援助	相談機能 強化	ボランティア 育成	ボランティア 表彰
ボランティア休止希望										
活動場所の確保困難	0.126*									
仕事や学校との両立困難	0.335**	0.328**								
活動資金不足	0.095*	0.512**	0.242**							
中心メンバー不足	0.378**	0.378**	0.359**	0.363**						
施設利用強化	-0.044	0.045	-0.079	0.097*	0.109*					
資金・物品援助	0.032	0.12*	0.057	0.227**	0.165**	0.425**				
相談機能強化	-0.002	0.085	-0.016	0.176**	0.194**	0.466**	0.473**			
ボランティア育成	-0.008	0.071	-0.023	0.15**	0.216**	0.49**	0.38**	0.593**		
ボランティア表彰	0	0.12*	0.135**	0.099*	0.134**	0.085	0.296**	0.201**	0.224**	
仲間と行える楽しみ	-0.233**	0.069	-0.122*	0.025	0.005	0.074	0.124*	0.118*	0.178**	0.13*
メンバー同士の支え合い	0.085	0.056	0.019	0.177**	0.276**	0.082	0.146**	0.237**	0.261**	0.057
相談相手	0.439**	0.194**	0.301**	0.163**	0.274**	-0.017	0.016	-0.04	-0.032	0.024
他者からの認知	0.047	0.161**	0.142**	0.163**	0.217**	0.126*	0.243**	0.167**	0.26**	0.34**
継続居住希望	0.154**	-0.114*	-0.204**	0.014	-0.174**	0.077	-0.003	0.034	0.017	-0.006
生活環境向上	-0.16**	-0.061	-0.197**	0.046	-0.184**	0.044	0.046	0.061	0.057	0.056
人間関係	0.231**	0.109*	0.111*	0.095*	0.121*	0.021	-0.012	-0.025	-0.043	0.015
まとまりの良さ	-0.196**	-0.072	-0.139**	-0.04	-0.141**	-0.066	-0.05	-0.019	-0.067	0.039

注) *: p<.05 ** : p<.01

施設利用強化	行政や社協は施設利用をしやすくすべきだ
資金・物品援助	行政や社協は、資金や物品の援助をすべきだ
相談機能強化	ボランティアが気軽に相談できるようにすべきだ
ボランティア育成	ボランティアに携わる人の育成を行うべきだ
ボランティア表彰	ボランティア活動やボランティアに対して表彰等を行うべきだ
仲間と行える楽しみ	ボランティアは仲間と一緒に「楽しみ」
メンバー同士の支え合い	ボランティアを続けるためには、メンバー同士の支え合いが必要だ
相談相手	ボランティア活動を行っていて、自分の辛さや苦しさを相談できる人がいない
他者からの認知	ボランティアの相手や地域の人に自分たちの頑張りを認めて欲しい
継続居住希望	今後も今住んでいる地域に住み続けたい
生活環境向上	この地域はこれから生活の場としてだんだんよくなる
人間関係	この地域の人間関係は面倒だ
まとまりの良さ	この地域のまとまりは良いほうだ

表V-3 重回帰分析結果

	仲間と行える 楽しみ	メンバー同士 の支え合い	相談相手	他者からの 認知	継続居住 希望	生活環境 向上	人間関係	まとまり の良さ
仲間と行える楽しみ								
メンバー同士の支え合い	0.309**							
相談相手	-0.153**	-0.026						
他者からの認知	0.124*	0.17**	0.17**					
継続居住希望	0.062	0.007	-0.109*	-0.029				
生活環境向上	0.193**	0.044	-0.069	0.023	0.406**			
人間関係	-0.124**	0.04	0.224**	0.084	-0.144**	-0.184**		
まとまりの良さ	0.249**	-0.003	-0.109*	0.057	0.278**	0.37**	-0.279**	

注) *: p<.05 ** : p<.01

仲間と行える楽しみ	ボランティアは仲間と一緒に「楽しみ」
メンバー同士の支え合い	ボランティアを続けるためには、メンバー同士の支え合いが必要だ
相談相手	ボランティア活動を行っていて、自分の辛さや苦しさを相談できる人がいない
他者からの認知	ボランティアの相手や地域の人に自分たちの頑張りを認めて欲しい
継続居住希望	今後も今住んでいる地域に住み続けたい
生活環境向上	この地域はこれから生活の場としてだんだんよくなる
人間関係	この地域の人間関係は面倒だ
まとまりの良さ	この地域のまとまりは良いほうだ

らない」を取り除き、改めて重回帰分析を行った。

重回帰分析による相関係数は表V-2の通り

である。また、表V-3に示す通り、偏回帰係数が統計的に有意であった説明変数は、「時間」（「仕事や学校との両立が難しい」）、「人的資源」

(「中心となるメンバーが不足している」)、「ボランティア仲間」(「ボランティアは仲間と一緒に居る『楽しみ』」)、「相談相手」(「ボランティア活動を行っていて、自分の辛さや苦しさを相談できる人がいない」)、「地域意識」(「この

地域の人間関係は面倒だ」)の 5 変数であり、分析枠組にあったその他の説明変数は統計的に有意なまでの関係がなかった。

偏回帰係数が統計的に有意であった 5 変数の中で、被説明変数に与える影響が最も大きかったのは標準偏回帰係数が 0.3 の「相談相手」、次に大きかったのは 0.26 の「人的資源」であった(表 V-4・図 V-1)。

このように重回帰分析から、ボランティア休止希望は、相談相手がいないと思う程、人的資源が不足していると思う程、時間的制約があると思う程、そして地域の人間関係が面倒だと思う程高くなり、また一方、ボランティア活動が仲間と一緒に居る「楽しみ」だと思うほど、ボランティア休止希望が低くなるという結果が示された。

重回帰分析で相談相手がいないことが、最もボランティア休止希望に大きな影響を与えるという結果、「地域意識」の「この地域の人間関係は面倒だ」とする構成要素がボランティア休止希望に影響を与えるという結果、本調査対象

表 V-4 重回帰分析結果 (まとめ)

説明変数	β	γ
時間	.14**	.34**
人的資源	.26**	.38**
ボランティア仲間	-.16**	-.23**
相談相手	.30**	.44**
地域意識	.10*	.23**
R ²	.35**	
Adj R ²	.31**	
N	337	

注) β : 標準偏回帰変数 γ : 相関係数

**p<.01 *p<.05

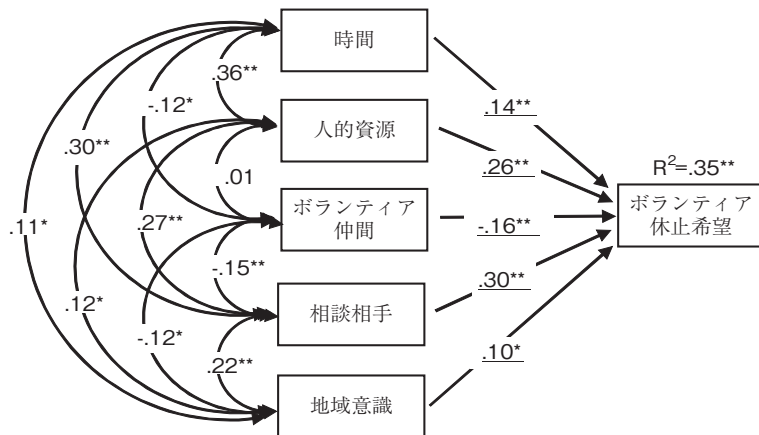
時間 : 仕事や学校との両立が難しい

人的資源 : 中心となるメンバーが不足している

ボランティア仲間 : ボランティアは仲間と一緒に居る「楽しみ」

相談相手 : ボランティア活動を行っていて、自分の辛さや苦しさを相談できる人がいない

地域意識 : この地域の人間関係は面倒だ



注) 下線付数字 : 標準偏回帰変数

下線無数字 : 相関係数

時間 : 仕事や学校との両立が難しい

人的資源 : 中心となるメンバーが不足している

ボランティア仲間 : ボランティアは仲間と一緒に居る「楽しみ」

相談相手 : ボランティア活動を行っていて、自分の辛さや苦しさを相談できる人がいない

地域意識 : この地域の人間関係は面倒だ

図 V-1 重回帰分析結果

の登録ボランティアの活動期間が長いことから、ボランティア活動メンバー間の関係性に着目し、ボランティア活動開始理由を説明変数、ボランティア休止希望を被説明変数として重回帰分析を実施した¹⁷⁾。ボランティア休止希望に最も大きい影響を与える変数は、標準偏回帰係数が0.33の「友だちなどからの誘いを断りにくかった」であった。ボランティア開始理由が友だちなどからの誘いを断りにくかったとする程、ボランティア休止希望が高くなるという結果であった(表V-5・図V-2)。

VI 考察

本調査対象が属するボランティアグループは、活動年数が10年以上の割合が約75%と高く、調査対象者のボランティア活動期間も長

表V-5 参加動機を説明変数とした重回帰分析結果

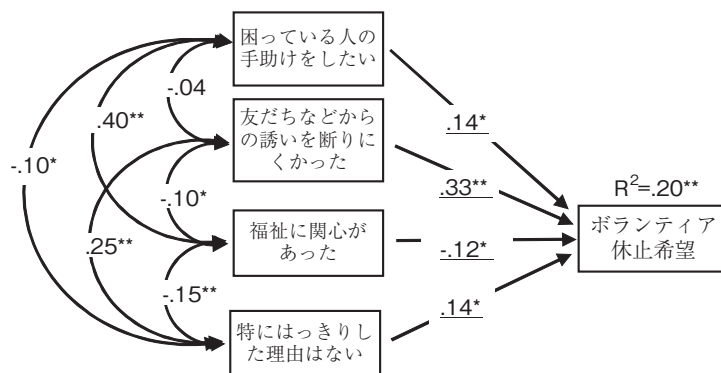
説明変数	β	γ
困っている人の手助けをしたい	.14*	-0.01
友だちなどからの誘いを断りにくかった	.33**	.37**
福祉に関心があった	-.12*	-.18**
特にはっきりした理由はない	.14*	.24**
R ²	.20**	
Adj R ²	.18**	
N	322	

β ：標準偏回帰変数 γ ：相関係数
**p<.01 *p<.05

い。友だちの誘いを断ることができずにボランティア活動に参加し、長期間ほぼ固定化したメンバーで活動を行っていることであろうことから、自分の辛さを相談することがはばかれているのではないだろうか。ボランティア開始前から既に関係性のある間柄のメンバーでのボランティア活動は、その活動年数の長さからボランティアメンバー間の凝集性は非常に高いものであるだろう。しかしながら凝集性には排他性が内在されており、この排他性への恐れから自分の辛さを吐露することをためらい、その結果相談相手の確保が難しくなり、それがボランティア休止希望に最も大きな影響を与えているのではないか。

また、自分が関わっている活動が「楽しみ」と思うことは、単純に活動継続に正の効果をもたらすであろうが、加えてボランティアは一般的に、自発性、無償性、公共性が基本的構成要素とされており、労働対価である賃金報酬とは異なる報酬概念によることから、ボランティア活動が仲間と一緒に「楽しみ」と感じられることがより大きな報酬となっているのではないか。従って、ボランティア活動を「楽しみ」と感じられる程ボランティア休止希望が低くなるという結果になったと考える。

以上のことから、ボランティア活動の継続には、自分の辛さや苦しさを相談できる相手の確



注) 下線付数字：標準偏回帰変数
下線無数字：相関係数

図V-2 参加動機を説明変数とした重回帰分析結果

保、人的資源の確保が大きく寄与するであろう。また、ボランティア活動が「楽しみ」だと感じられるような、ボランティア活動の環境整備も、ボランティアの活動継続に必要であるだろう。情緒的支援の枠組にあった社協や行政に対する要望の説明変数はいずれも、ボランティア休止希望と統計的に有意な関係ではなかったことから、相談相手や環境整備に関与する社会的資源としてはピアな関係性の者が有効であるだろう。それには、ボランティア活動の横の関係を構築し、他のボランティア活動メンバーと様々な意見交換が可能となるような仕組みづくりや、学生ボランティアなどの参加がボランティア活動の雰囲気を変え、ボランティア活動内で相談相手ができることも考えられることから、定期的でなくても構わないので新たなボランティアの受け入れを積極的にしていくことが必要であると考えられる。

Ⅶ おわりに

今回の分析結果からは、ボランティア活動の継続要因として得られた説明変数とボランティア休止希望との明確な因果関係までの解明までには至っていない。この点については今後の課題としたい。また、本調査は一地方都市における限定的な調査であることから、一般化することには留意が必要である。

社会状況の変化に伴い地域へのまなごしは熱さを増しており、本調査対象のような地域に根ざした人々による活動への期待はますます大きなものとなるであろうことから、ボランティア活動継続要因を明らかにすることは重要な課題であると考えられる。

謝辞

調査にご協力いただいた、A市ボランティア連絡協議会の登録ボランティアの方々、また、調査実施にあたりA市ボランティア連絡協議会との調整、配票・回収、その他にも全面的にご協力いただいた、A市社会福祉協議会地域福祉担当職員の方々、そして、B県内のボランティア連絡協議会

の調査データの使用をお許しいただいた、B県ボランティアセンターの職員の方に深謝致します。

注

- 1) 全国社会福祉協議会、2004、『全国ボランティア活動者実態調査報告書』。
- 2) 望月七重・李政元・包敏、2002、「高齢者のボランティア活動(参加・継続意向)に影響を与える要因-高齢者大学の社会還元活動実態調査から」『関西学院大学社会学部紀要』91: 181-193。
- 3) 全国社会福祉協議会、2004、『2004年ボランティア活動年報(ボランティアセンター事業年報)2003年度実績/2004年3月現在』。
- 4) 小澤千穂子、1998、「有償ボランティアの参加動機と活動継続意志の維持要因・阻害要因-世田谷ふれあい公社協力員へのケーススタディによる検討」『大妻女子大学紀要 家政系』34: 221-237。
- 5) 青山美智代・西川正之・秋山学・中迫勝、2000、「老人福祉施設における介護ボランティア活動の継続要因に関する研究」『大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学』48(2): 343-358。
- 6) 稲月正、1994、「ボランティア構造化の要因分析」『季刊社会保障研究』29(4): 334-347。
- 7) 直井道子、2001、「第2章 高齢者のサポートと家族」『幸福に老いるために-家族と福祉のサポート』勁草書房、18-40。
- 8) 前掲7)
- 9) 前掲7)
- 10) ボランティアコーディネータも負担感の軽減に影響を与える存在であると考えられるが、今回はボランティアコーディネータの役割も担っている「行政や社協」に替えて考えたので、「人的資源」にはボランティア活動に必要とされる活動メンバーを設定した。
- 11) 家族や友人なども精神的支えとして大きな存在であると考えられるが、ボランティア活動というものに主眼を置いたので、本論ではボランティア活動の「仲間」を情緒的支援とした。
- 12) 相談相手を限定した設問でないため、「相談相手」を明確化できないことを断っておきたい。
- 13) A市ボランティア連絡協議会には、67団体、2,461人登録されているが、そのうち3団体(502人)は配票する際に、グループの構成人数が多く配票が難しいという理由で配票を行えなかったことから、数の不一致がみられるのである。

なお、先述したように現在 A 市ボランティア連絡協議会は、個人ボランティアの登録を実施していないので、調査対象者は全ていずれかのボランティアグループに所属している。

- 14) A 市社会福祉協議会、1991、『社協のあゆみ 創立 40 周年記念誌』。
- 15) なお、2005 年の登録会員数については、現在 A 市ボランティア連絡協議会は、個人ボランティアの登録を実施していないので、個人ボランティアは含まれていない。
- 16) 全国社会福祉協議会、2002、『全国ボランティア活動者実態調査報告書』。
- 17) ボランティア活動を始めた理由として、次の 11 変数を説明変数とした。「社会のために役立

ちたい」、「困っている人の手助けをしたい」、「余った時間を有効につかいたい」、「自分の勉強になる」、「他人とのふれあいが欲しい」、「身近にボランティア活動を見聞きして」、「自分のやりたいことを発見したい」、「友だちなどからの誘いを断りにくかった」、「福祉に関心があった」、「進学・就職で有利になるようにしたい」、「特にはっきりした理由はない」。それぞれの設問は、「1 全くそうだ」、「2 まあそうだ」、「3 あまりそうではない」、「4 全くそうではない」の 4 件法による回答である。数字が大きいほど肯定するように「4 全くそうだ」、「3 まあそうだ」、「2 あまりそうではない」、「1 全くそうではない」として変数の方向と整え、重回帰分析を実施。